



●『試薬』の仕事

伊勢久株式会社

代表取締役社長 高木 裕明

本原稿が『技術のひろば』に掲載されるまでに、終息していることを願うばかりであるが、現在新型コロナウイルス『SARS』が中国、台湾を中心に猛威を振るっている。何故か今日現在日本国内には感染例は無いが、いずれもたらされると考えなければいけない。水際の防疫態勢は充分だろうか。又、感染者が発見された時の早急な情報公開も、二次感染を防止する為に大変重要である。しかし科学技術が随分進歩した割に、これほどまでに人類が翻弄される病気が、身近に迫っている例を聞いたことが無い。SARSの正体とされるコロナウイルスのゲノムも解析されたので、ワクチンが出来るのも間近かではあろうが、今後とも我々は次なるウイルスの出現に、際限無く脅かされるのだろうか？いずれにせよ科学技術の更なる進歩に期待するしか無いように思う。

さて以上のような未知なる物を分析するにも、実は『試薬』が無ければ何ともならないのである。試薬とは読んで字のごとく試験や研究用の薬品のことである。試薬は大学などの研究室で使われているだけでなく、その性格上あらゆる分野で使われている。例えば、半導体の原材料の不純物の分析や、医薬品の品質管理、薬効成分の分析などである。又、生命科学の分野では遺伝子、免疫などの現象の

解明に、更に食品分野では残留農薬や発ガン性物質、食品添加物等の試験に用いられ、大腸菌などの中毒を起す細菌の検査にも使われている。我々のまわりにあるほとんどの製品が『試薬』がなければ誕生しなかったか、あるいは現在のような高い品質を得ることは出来なかったと言われている。化学物質の数だけあると言われる試薬だが、中には毒劇物や危険物そして向精神薬など管理基準の厳しいものも多く、それらを扱っていると言う責任の大きさをつくづく感じる。そんな中、お客様から薬品の廃棄処分のご相談を度々頂くようになり、その都度処分業者を紹介していたが、試薬瓶一本からの話なのでなかなか効率の良い処理が出来ず、処理業者から収集運搬業のお誘いを受けるようになった。薬品は開封前に比べ開封後ではその危険度合いが極端に大きくなる。化学薬品を製造・販売するものとして、不要となった薬品類を回収処分することは地球環境を守るという意味からも、社会的責任をまっとうすることになり全社で総力を挙げ取り組んでいる。名工振でのセミナーをきっかけに取得した環境ISOの認証も、化学薬品取り扱いのリスク管理として大いに役立っており、今後とも拡大取得を目指していきたい。